

# 経営経済数学

## 凸集合

塩浦昭義

東京工業大学 経営工学系

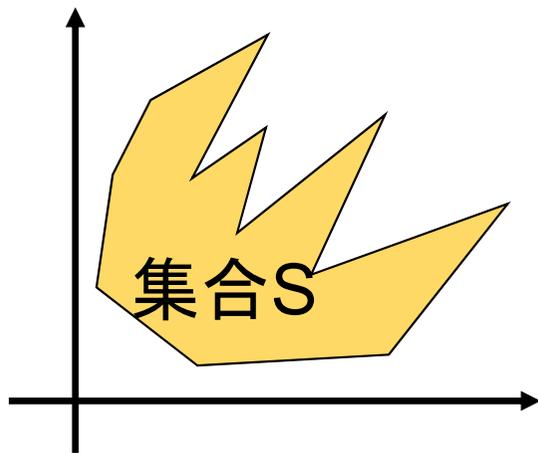
shioura.a.aa@m.titech.ac.jp

# 期末試験の実施要領

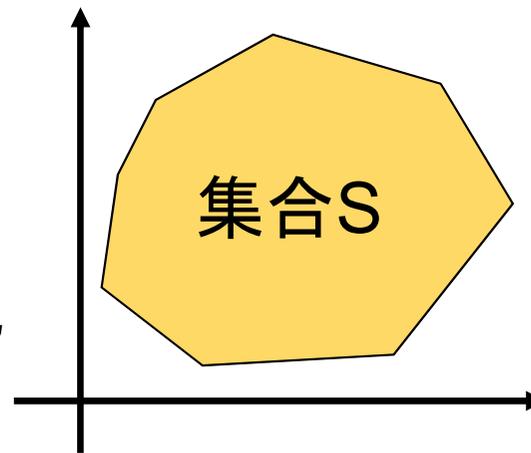
- 日時：7月28日(金) 15:40～17:10 (90分)
- 場所：西9号館3階W9-324(W933)
  - 座席はこちらで指定
- 試験内容：第8回～第13回の授業内容
- 100点満点，40点以下は不合格(単位不可)
  - 中間試験の結果との合計÷2が60点未満の場合も不合格  
(レポート課題提出者は救済の可能性あり)
- 手書きのA4用紙一枚のみ持ち込み可
  - 印刷やコピーは不可
  - 試験終了後に回収します
- 本，ノート等の持ち込みは不可

# 凸集合・凸関数のありがたみ

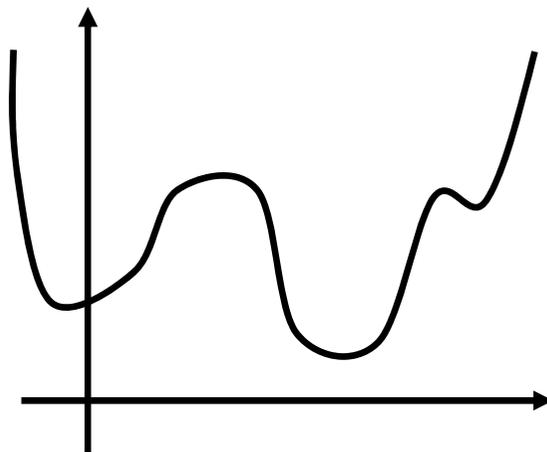
- 集合  $S \subseteq \mathbb{R}^n$  の上で関数  $f: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}$  を最小化・最大化する  
---  $S, f$  がどのようなときに問題が解きやすい？



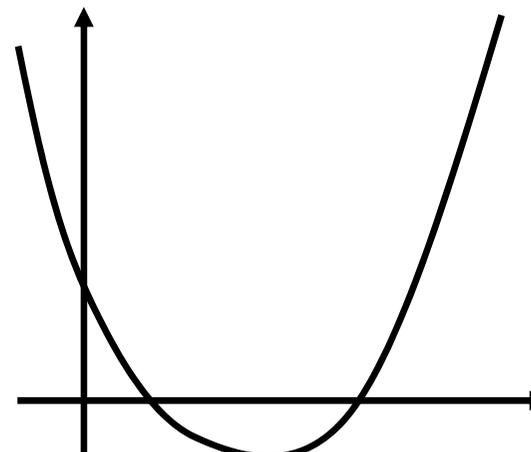
集合Sの上で  
 $x+y$  の最大化



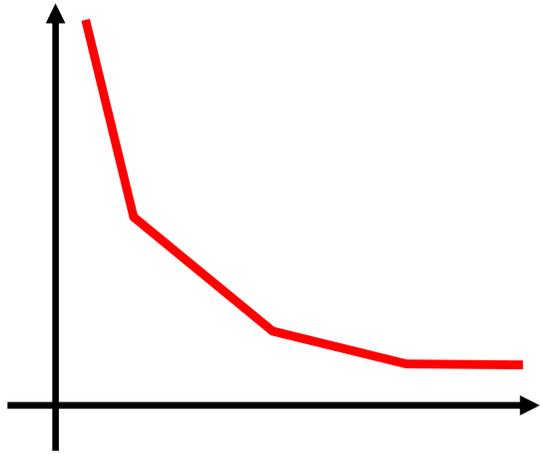
このような  
集合・関数  
は様々な  
分野で  
しばしば  
現れる



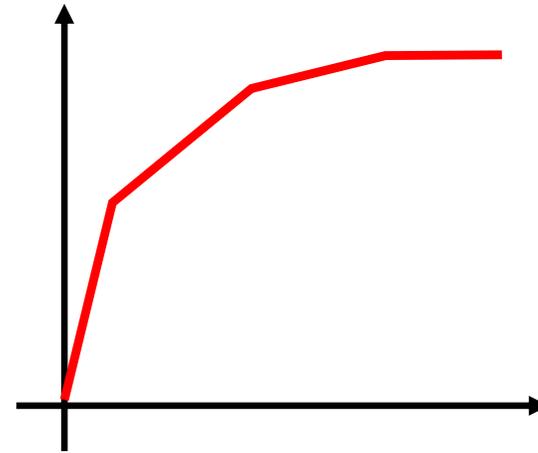
関数の最小化



# 凸関数・凹関数の具体例



- ある仕事を処理するための  
労働力と処理時間の関係



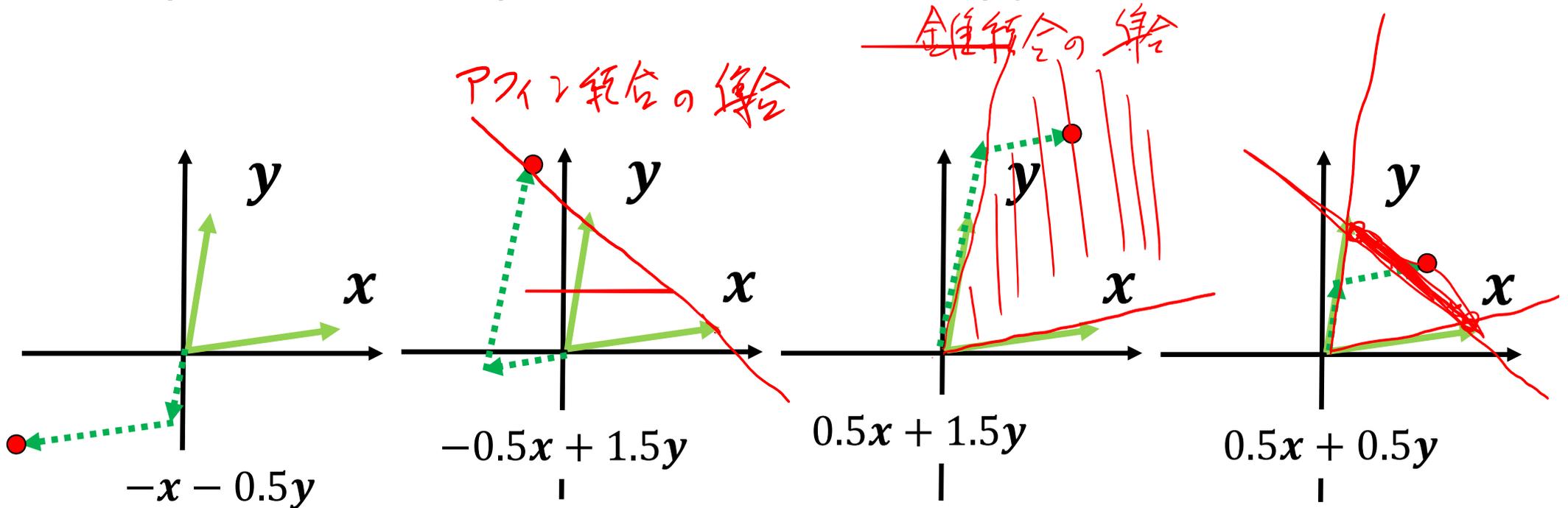
- ある商品を生産する際の  
生産量と~~単位~~生産コスト  
総

# 2つのベクトルの「結合」

定義: 2つの実ベクトル  $x, y \in \mathbb{R}^n$  の

線形結合 --- 実数  $\alpha, \beta$  を用いて  $\alpha x + \beta y$  と表されるベクトル  
とくに,

- $\alpha + \beta = 1$  のとき  $\rightarrow \alpha x + \beta y$  はアフィン結合
- $\alpha \geq 0, \beta \geq 0$  のとき  $\rightarrow \alpha x + \beta y$  は錐結合 (非負線形結合)
- $\alpha + \beta = 1, \alpha \geq 0, \beta \geq 0$  のとき  $\rightarrow \alpha x + \beta y$  は凸結合



# 「結合」に関して閉じている集合

定義: 集合  $S \subseteq \mathbb{R}^n$  に対し

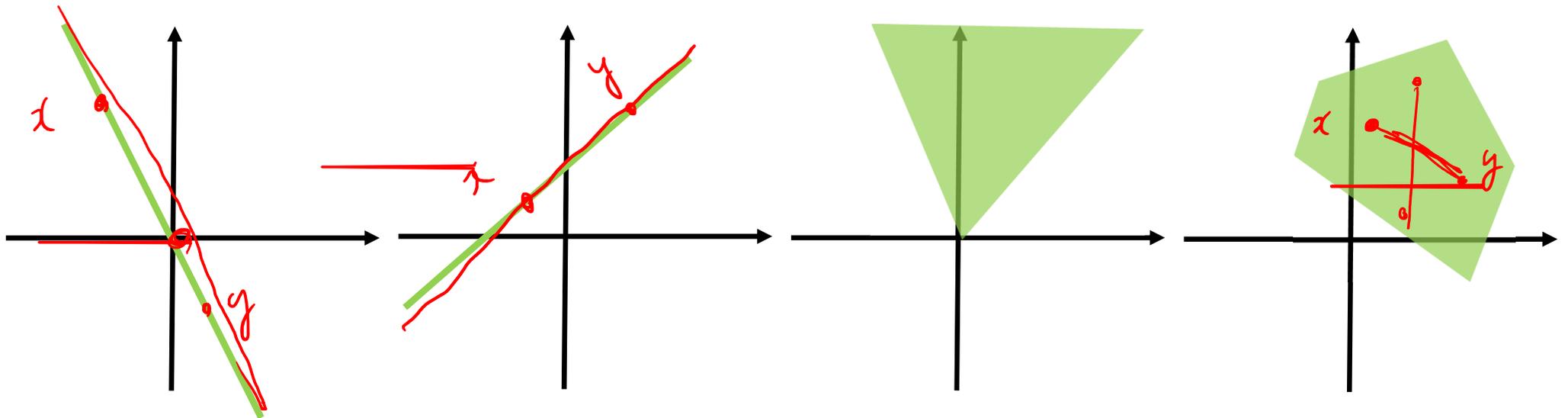
- 任意の  $x, y \in S$  の線形結合に関して閉じている  $\rightarrow S$  は部分空間  
(つまり,  $\forall x, y \in S, \forall \alpha, \beta \in \mathbb{R}, \alpha x + \beta y \in S$  が成立)
- 任意の  $x, y \in S$  のアフィン結合に関して閉じている  
(つまり,  $\forall x, y \in S, \forall \alpha, \beta \in \mathbb{R}, \alpha + \beta = 1 \Rightarrow \alpha x + \beta y \in S$  が成立)  
 $\rightarrow S$  はアフィン集合
- 任意の  $x, y \in S$  の錐結合に関して閉じている  
(つまり,  $\forall x, y \in S, \forall \alpha, \beta \in \mathbb{R}, \alpha, \beta \geq 0 \Rightarrow \alpha x + \beta y \in S$  が成立)  
 $\rightarrow S$  は凸錐
- 任意の  $x, y \in S$  の凸結合に関して閉じている  
(つまり,  $\forall x, y \in S, \forall \alpha, \beta \in \mathbb{R},$   
 $\alpha + \beta = 1$ かつ $\alpha, \beta \geq 0 \Rightarrow \alpha x + \beta y \in S$  が成立)  
 $\rightarrow S$  は凸集合

# 「結合」に関して閉じている集合

OES

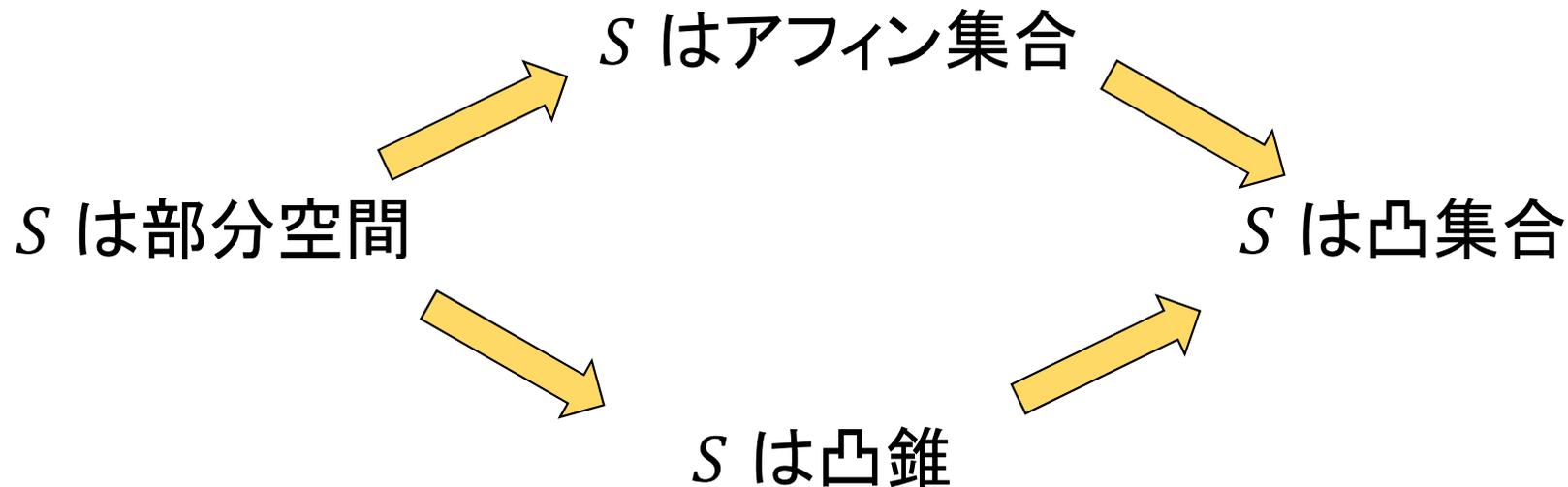
定義: 集合  $S \subseteq \mathbb{R}^n$  に対し

- 任意の  $x, y \in S$  の線形結合に関して閉じている  $\rightarrow S$  は部分空間  
(つまり,  $\forall x, y \in S, \forall \alpha, \beta \in \mathbb{R}, \alpha x + \beta y \in S$  が成立)
- 任意の  $x, y \in S$  のアフィン結合に関して閉じている  
 $\rightarrow S$  はアフィン集合
- 任意の  $x, y \in S$  の錐結合に関して閉じている  $\rightarrow S$  は凸錐
- 任意の  $x, y \in S$  の凸結合に関して閉じている  $\rightarrow S$  は凸集合



# 4種類の集合の関係

命題: 集合  $S \subseteq \mathbb{R}^n$  に対し, 以下が成立:



例:  $\{(x_1, x_2, x_3) \mid x_1 + x_2 + x_3 = 1\}$  はアフィン集合であって,  
部分空間ではない.

※ 原点を含むアフィン集合は部分空間である.

# 4種類の集合の関係

$$\underline{x, y \in S}, \quad \alpha, \beta \in \mathbb{R}, \quad \underline{\alpha + \beta = 1} \Rightarrow \underline{\alpha x + \beta y \in S}$$

$$x_1 + x_2 + x_3 = 1 \quad \circ$$

$$y_1 + y_2 + y_3 = 1 \quad \circ$$

$$(\alpha x_1 + \beta y_1, \alpha x_2 + \beta y_2, \alpha x_3 + \beta y_3)$$

$$\underline{(\alpha x_1 + \beta y_1) + (\alpha x_2 + \beta y_2) + (\alpha x_3 + \beta y_3)} = 1$$

$$\alpha(x_1 + x_2 + x_3) + \beta(y_1 + y_2 + y_3) = \alpha + \beta = 1$$

例:  $S = \{(x_1, x_2, x_3) \mid \underline{x_1 + x_2 + x_3 = 1}\}$  はアフィン集合であって、  
部分空間ではない。

※ 原点を含むアフィン集合は部分空間である。

# 部分空間の特徴付け

**命題:** 集合  $S \subseteq \mathbb{R}^n$  が部分空間であることの必要十分条件は、以下の2条件を満たすことである:

$$(i) \forall x \in S, \forall \alpha \in \mathbb{R}, \alpha x \in S, \quad (ii) \forall x, y \in S, x + y \in S.$$

(証明) 定義より,  $S$  が部分空間であるとは,  
 $\forall x, y \in S, \forall \alpha, \beta \in \mathbb{R}, \alpha x + \beta y \in S$  を満たすことである.  
よって, 必要性は明らか.

一方, (i), (ii) の条件が成り立つと仮定する.

任意の  $x, y \in S, \alpha, \beta \in \mathbb{R}$  に対し, 条件 (i) より  $\alpha x \in S, \beta y \in S$  成立.  
これと条件 (ii) より  $\alpha x + \beta y \in S$  成立. よって十分性も示された. ■

# アフィン集合と部分空間の関係

**命題:** アフィン集合  $S \subseteq \mathbb{R}^n$  は, 原点  $\mathbf{0}$  を含むとき, 部分空間である.

(証明) 部分空間に関する前のスライドの命題より,

(i)  $\forall x \in S, \forall \alpha \in \mathbb{R}, \alpha x \in S$ , (ii)  $\forall x, y \in S, x + y \in S$ .

を示せば良い.

[(i) の証明] 任意の  $x \in S, \alpha \in \mathbb{R}$  に対し,  $y = \mathbf{0}, \beta = 1 - \alpha$  とおけば,  $x$  と原点  $\mathbf{0}$  とのアフィン結合  $\alpha x + \beta y = \alpha x$  は  $S$  に含まれる.

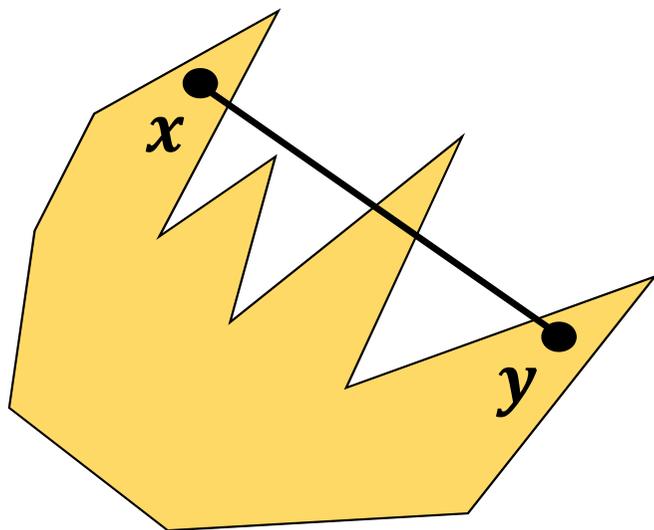
[(ii) の証明] 任意の  $x, y \in S$  に対し,  $\alpha = \beta = 0.5$  とおくと,  $x$  と  $y$  アフィン結合  $\alpha x + \beta y = 0.5 \cdot (x + y)$  は  $S$  に含まれる.

このことと, 上記で示した条件 (i) より  $2 \cdot 0.5 \cdot (x + y) = x + y$  は  $S$  に含まれる. ■

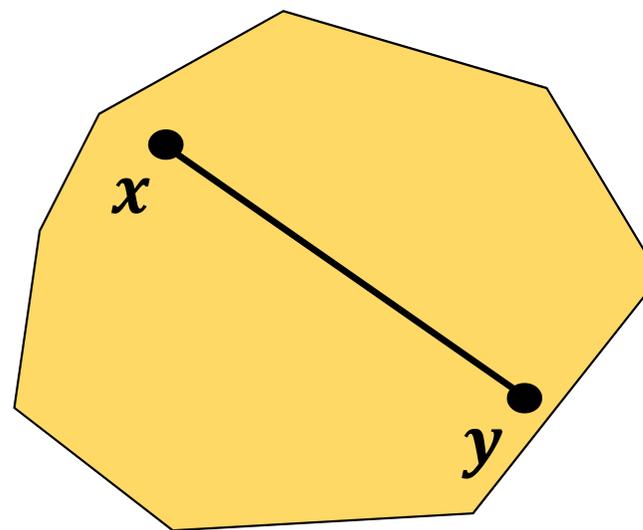
# 凸集合

- 定義: 集合  $S \subseteq \mathbb{R}^n$  は凸集合

$$\iff \forall x, y \in S, 0 \leq \forall \alpha \leq 1, \alpha x + (1 - \alpha)y \in S$$



凸集合ではない



凸集合である

※ 空集合  $\emptyset$  や空間全体  $\mathbb{R}^n$  も凸集合

# 凸集合の性質

**定理11.1:** 凸集合の族  $S_\lambda$  ( $\lambda \in \Lambda$ ) の共通部分  $S^* = \bigcap_{\lambda \in \Lambda} S_\lambda$  は凸集合

※集合  $\Lambda$  は非可算無限集合でもよい

(証明)凸集合の定義より,

$$\forall x, y \in S^*, \forall \alpha, \beta \in \mathbb{R}, \quad \alpha + \beta = 1 \text{ かつ } \alpha, \beta \geq 0 \Rightarrow \alpha x + \beta y \in S^*$$

を示せば良い.

$S^* = \bigcap_{\lambda \in \Lambda} S_\lambda$  なので,

$$\alpha x + \beta y \in S^* \iff \text{任意の } \lambda \in \Lambda \text{ に対して } \alpha x + \beta y \in S_\lambda$$

各  $S_\lambda$  は凸集合であり,  $x, y \in S^* \subseteq S_\lambda$  であるから,  $\alpha x + \beta y \in S_\lambda$  成立.

よって,  $\alpha x + \beta y \in S^*$  が得られた. ■

# 凸集合の性質

**定理11.1:** 凸集合の族  $S_\lambda$  ( $\lambda \in \Lambda$ ) の共通部分  $\bigcap_{\lambda \in \Lambda} S_\lambda$  は凸集合

**定理11.1の系:** 任意の集合  $S \subseteq \mathbb{R}^n$  に対し,

$S$  を含む(包含関係に関して)**最小の**凸集合  $S^*$  が存在する.

(証明)  $S$  を含む凸集合は存在(例:  $\mathbb{R}^n$ ).

$S$  を含むすべての凸集合  $S_\lambda$  ( $\lambda \in \Lambda$ ) に対し,  $S^* = \bigcap_{\lambda \in \Lambda} S_\lambda$  とおく

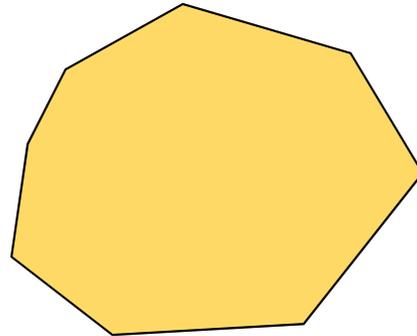
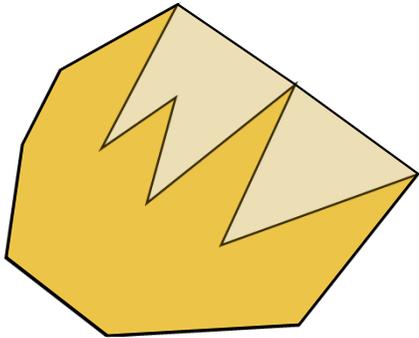
→  $S^*$  は  $S$  を含む凸集合であり,

$S$  を含む任意の凸集合は  $S^*$  を必ず含む

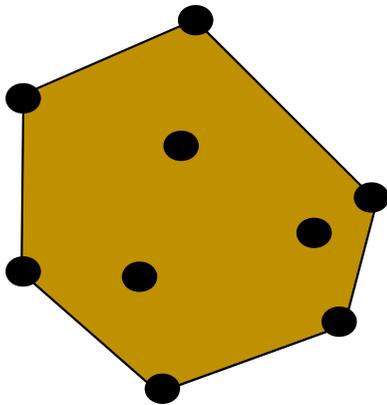
∴  $S^*$  は最小の凸集合. ■

# 集合の凸包

定義: 集合  $S \subseteq \mathbb{R}^n$  の凸包  $\text{co } S = S$  を含む最小の凸集合



凸集合の凸包  
= もとの集合そのもの



2次元ベクトル集合の  
凸包は凸多角形

※ 凸包は閉集合とは限らない  
例:  $\{(x, y) \mid y \geq 1/x\} \cup \{(0, 0)\}$   
の凸包は  
 $\{(x, y) \mid x > 0, y > 0\} \cup \{(0, 0)\}$

# 多数のベクトルの「結合」

線形結合, 凸結合などは, 3つ以上のベクトルに対しても定義可能

**定義:**  $m$  個のベクトル  $\mathbf{a}^1, \mathbf{a}^2, \dots, \mathbf{a}^m \in \mathbb{R}^n$  の

**線形結合** ---  $\alpha_1, \dots, \alpha_m \in \mathbb{R}$  を用いて  $\sum_{i=1}^m \alpha_i \mathbf{a}^i$  と表されるベクトル  
とくに

- $\sum_{i=1}^m \alpha_i = 1$  のとき  $\rightarrow \sum_{i=1}^m \alpha_i \mathbf{a}^i$  は **アフィン結合**
- $\alpha_i \geq 0 (i = 1, \dots, m)$  のとき  $\rightarrow \sum_{i=1}^m \alpha_i \mathbf{a}^i$  は **錐結合 (非負線形結合)**
- $\sum_{i=1}^m \alpha_i = 1, \alpha_i \geq 0 (i = 1, \dots, m)$  のとき  $\rightarrow \sum_{i=1}^m \alpha_i \mathbf{a}^i$  は **凸結合**

# 「結合」に関する性質その1

**命題:** 集合  $S \subseteq \mathbb{R}^n$  に対し以下が成立:

- $S$  が部分空間  $\rightarrow a^1, \dots, a^m \in S$  の線形結合は  $S$  に含まれる
- $S$  がアフィン空間  $\rightarrow a^1, \dots, a^m \in S$  のアフィン結合は  $S$  に含まれる
- $S$  が凸錐  $\rightarrow a^1, \dots, a^m \in S$  の錐結合は  $S$  に含まれる
- $S$  が凸集合  $\rightarrow a^1, \dots, a^m \in S$  の凸結合は  $S$  に含まれる

凸集合の場合のみ, 以降のスライドで証明する.

他の証明も同様.

# 「結合」に関する性質その1

**命題:** 集合  $S \subseteq \mathbb{R}^n$  が凸集合

→  $a^1, \dots, a^m \in S$  の任意の凸結合は  $S$  に含まれる

(証明) 任意の非負の実数  $\alpha_1, \dots, \alpha_m$  (ただし  $\alpha_1 + \dots + \alpha_m = 1$ ) に対して,  $x = \alpha_1 a^1 + \alpha_2 a^2 + \dots + \alpha_m a^m$  が  $S$  に含まれることを示す.

$m = 2$  のときは定義より明らか.

$m > 2$  のとき: 帰納法で証明.

$\alpha_1, \dots, \alpha_m$  のいずれかが  $0$  に等しい場合,

$x$  は  $m-1$  個のベクトルの凸結合である.  $\therefore$  帰納法の仮定より  $x \in S$ .

# 「結合」に関する性質その1

**命題:** 集合  $S \subseteq \mathbb{R}^n$  が凸集合

→  $\mathbf{a}^1, \dots, \mathbf{a}^m \in S$  の任意の凸結合は  $S$  に含まれる

(証明のつづき)

$\alpha_1, \dots, \alpha_m$  のすべてが正のとき,  $1 - \alpha_m = \sum_{i=1}^{m-1} \alpha_i > 0$  なので,

$$\begin{aligned} \mathbf{x} &= \alpha_1 \mathbf{a}^1 + \alpha_2 \mathbf{a}^2 + \dots + \alpha_m \mathbf{a}^m \\ &= (1 - \alpha_m) \left\{ \frac{\alpha_1}{1 - \alpha_m} \mathbf{a}^1 + \frac{\alpha_2}{1 - \alpha_m} \mathbf{a}^2 + \dots + \frac{\alpha_{m-1}}{1 - \alpha_m} \mathbf{a}^{m-1} \right\} + \alpha_m \mathbf{a}^m \end{aligned}$$

と表せる.

$$\mathbf{y} = \frac{\alpha_1}{1 - \alpha_m} \mathbf{a}^1 + \frac{\alpha_2}{1 - \alpha_m} \mathbf{a}^2 + \dots + \frac{\alpha_{m-1}}{1 - \alpha_m} \mathbf{a}^{m-1} \text{ とおくと,}$$

$$\frac{\alpha_{i-1}}{1 - \alpha_i} \geq 0 \quad (i = 1, \dots, m - 1), \quad \sum_{i=1}^{m-1} \frac{\alpha_{i-1}}{1 - \alpha_i} = 1 \text{ より,}$$

$\mathbf{y}$  は  $m-1$  個のベクトルの凸結合  $\therefore$  帰納法の仮定より  $\mathbf{y} \in S$ .

$\mathbf{x} = (1 - \alpha_m) \mathbf{y} + \alpha_m \mathbf{a}^m$  なので,  $\mathbf{x}$  は 2 個のベクトルの凸結合

$\therefore$  帰納法の仮定より  $\mathbf{x} \in S$ . ■

# 「結合」に関する性質その2

**命題:** ベクトル  $a^1, \dots, a^m \subseteq \mathbb{R}^n$  に対し以下が成立:

- $a^1, \dots, a^m$  の線形結合全体は部分空間
- $a^1, \dots, a^m$  のアフィン結合全体はアフィン空間
- $a^1, \dots, a^m$  の錐結合全体は凸錐
- $a^1, \dots, a^m$  の凸結合全体は凸集合

(証明の概略) 任意の  $x, y \in S$  の  $\circ\circ$  結合に関して閉じていることを示せば良い.

つまり,  $x = \sum_i \eta_i a^i, y = \sum_i \gamma_i a^i$  の  $\circ\circ$  結合  $z = \alpha x + \beta y$  が  $m$  個のベクトルの  $\circ\circ$  結合  $z = \sum_i \lambda_i a^i$  という形で表現できることを示せば良い.

凸集合の場合のみ, 以降のスライドで詳しく証明. 他の証明も同様.

# 「結合」に関する性質その2

命題: ベクトル  $\mathbf{a}^1, \dots, \mathbf{a}^m \subseteq \mathbb{R}^n$  に対し

$\mathbf{a}^1, \dots, \mathbf{a}^m$  の凸結合全体は凸集合

(証明)  $\mathbf{a}^1, \dots, \mathbf{a}^m$  の凸結合全体を  $S$  とおく.

任意の  $\mathbf{x}, \mathbf{y} \in S$  の凸結合が  $S$  に含まれることを示せば良い.

$\mathbf{x}, \mathbf{y} \in S$  なので,  $\sum_i \eta_i = 1, \sum_i \lambda_i = 1, \eta_i \geq 0, \lambda_i \geq 0 (i = 1, 2, \dots, m)$

を用いて  $\mathbf{x} = \sum_i \eta_i \mathbf{a}^i, \mathbf{y} = \sum_i \lambda_i \mathbf{a}^i$  と表現できる.

したがって,  $\mathbf{x}, \mathbf{y}$  の凸結合  $\mathbf{z} = \alpha \mathbf{x} + \beta \mathbf{y} (\alpha + \beta = 1, \alpha, \beta \geq 0)$  は

$$\mathbf{z} = \sum_i (\alpha \eta_i + \beta \lambda_i) \mathbf{a}^i$$

という形で表現できる. ここで  $\gamma_i = \alpha \eta_i + \beta \lambda_i$  とおくと,

$$\sum_i \gamma_i = \sum_i (\alpha \eta_i + \beta \lambda_i) = \alpha \sum_i \eta_i + \beta \sum_i \lambda_i = \alpha + \beta = 1$$

および  $\gamma_i = \alpha \eta_i + \beta \lambda_i \geq 0$  が成り立つので,  $\mathbf{z}$  は  $\mathbf{a}^1, \dots, \mathbf{a}^m$  の凸結合

である. ゆえに  $\mathbf{z} \in S$  が成り立つ. ■

# 演習問題

問1: 任意の集合  $S \subseteq \mathbb{R}^n$  に対し,  $S$  を含む (包含関係に関して)

最小のアフィン空間  $S^*$  が存在することを証明せよ.

問2:  $\{(x, y) \mid x > 0, y > 0\} \cup \{(0, 0)\}$  が凸集合であることを証明せよ.

問3: 凸集合  $S \subseteq \mathbb{R}^n$  が以下の条件★を満たすとき,

$S$  が凸錐であることを証明せよ: (条件★)  $\forall x \in S, \forall \alpha \geq 0, \alpha x \in S$